



爺ヶ岳における GPS ロガーを装着したライチョウの行動圏と利用環境

日本におけるライチョウ研究については、それぞれの山系・山岳にどのくらいのライチョウが生息しているかというところにフォーカスされてきました。私たちが調査している後立山連峰爺ヶ岳周辺ではなわばり数の増減はありますが安定しています（図1a）。富山雷鳥研究会が長年にわたり調査している立山室堂平周辺も同様の傾向を示しています。一方、静岡ライチョウ研究会と共同で調査している南アルプス南部では茶臼岳周辺ではなわばり数が安定していますが、世界最南端の生息地イザルガ岳ではここ数年なわばりが確認されなくなっています（図1b）。このような調査は、絶滅危惧種であるライチョウの生息状況を把握する上で、欠かせないことだと思います。

ライチョウは高山生態系のシンボルです。登山道を歩いていて、ライチョウに出会うことができると、とても嬉しい気持ちになります。皆さんもそうかなと思います。ライチョウは神出鬼没です。出会う時には本当に近くで足元に来ることもあります（写真1）。そうかと思えば、一日歩いても全く出会えないこともあります。皆さんもそんな印象を持っているのではないのでしょうか。全く出会えない時、彼らはどこで何をしているのでしょうか。ハイマツの中に身を潜めているのでしょうか。それとも、私たちから見えない登山道から離れた場所でガンコウランやコケモモの実を食べているのでしょうか。見ている時の情報から彼らが利用している環境を調べると、明らかに偏りが生じることは皆さんもお分かりかと思いますが、私たちからライチョウが見えている、見えていないに関わらず、定期的に彼らがどこにいるかを把握することが重要です。

技術の進歩には目覚ましいものがあります。空中生活に著しく適応したハリオアマツバメ（47～169g）やコチドリ（40g弱）にGPSロガー（正確な位置情報を記録する装置）を装着し、渡りルートや越冬地、生息環境の解明が行われています。こんな小さな鳥たちにつけて影響はないのかと心配されるかもしれませんが、適切な重さのGPSロガー（体重の3%程度）をちゃんと装着すれば、私たちは素晴らしい情報を得ることができます。ライチョウについては、海外でさまざまな研究が行われていますが、日本ではこれまでそのような研究はありません。そのため、2021年からライチョウにGPSロガーを装着し試行錯誤を重ねてきました（写真2）。その結果、ある程度の成果を得ることができました。

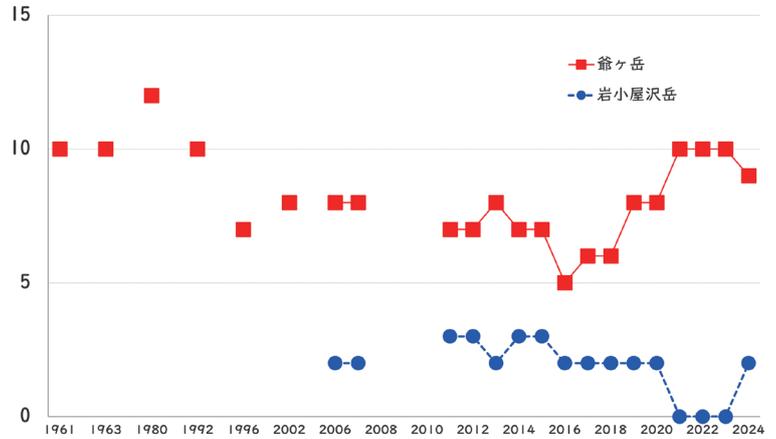


図1a 後立山連峰爺ヶ岳・岩小屋沢岳におけるライチョウのなわばり数の経年変化

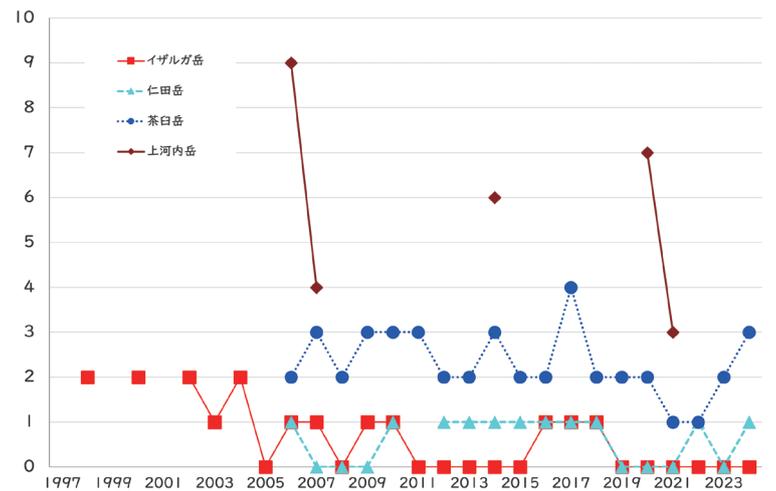


図1b 南アルプス南部イザルガ岳から上河内岳におけるライチョウのなわばり数の経年変化



写真1 ヒメクロマメノキの葉を食するライチョウ成鳥雌 (2013年7月11日 爺ヶ岳)



写真2 ネックレスタイプのGPS ロガーをつけているライチョウ成鳥雄
(2022年10月12日 爺ヶ岳)

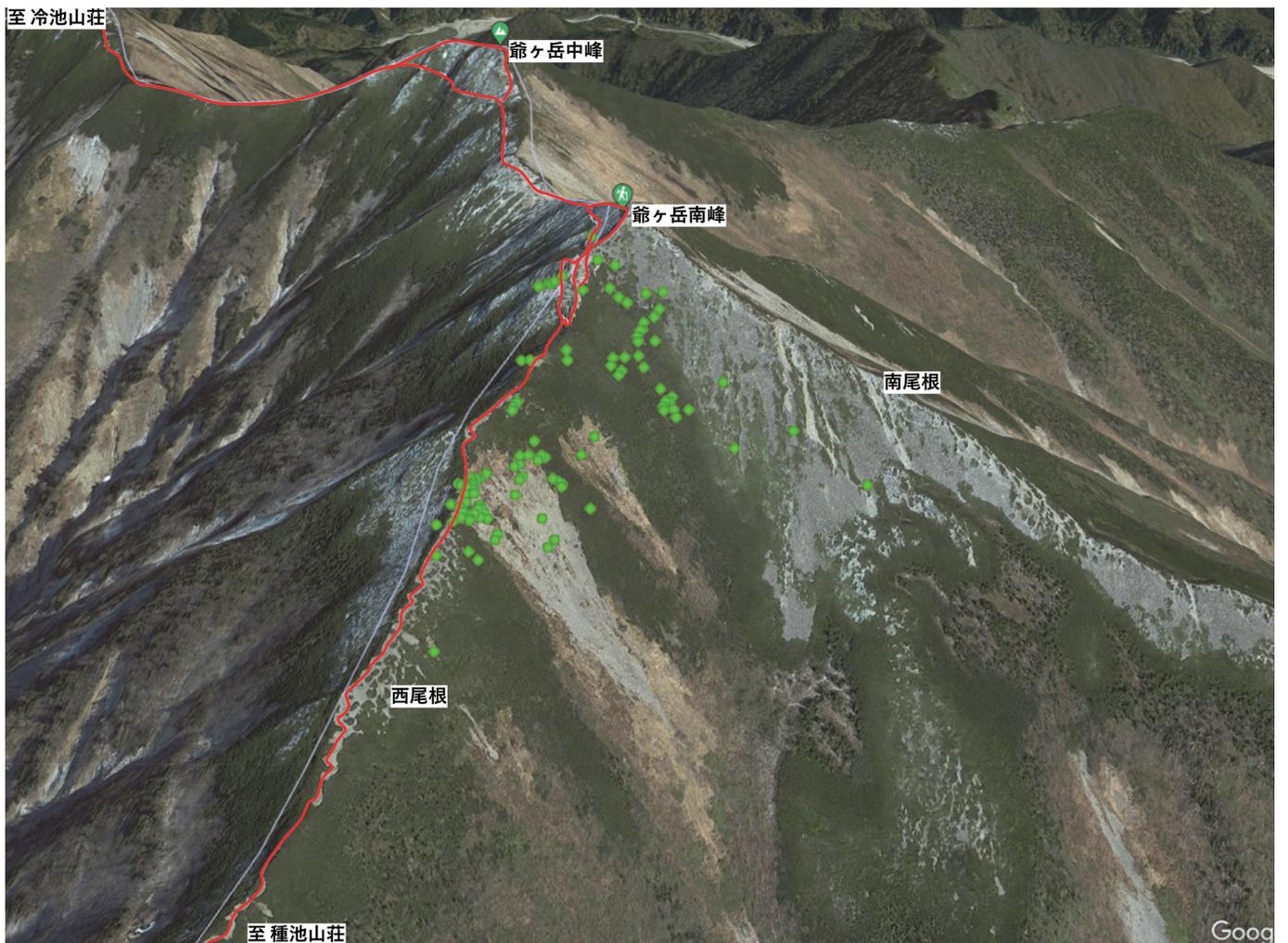


図2a 爺ヶ岳南峰西尾根南側になわばりを所有していた成鳥雄の活動点(緑色)(2022年7月1日～8日まで
4～19時まで1時間毎に取得、ただし衛星の捕捉状況が悪い点は除く)。赤線は登山道を示す。



特集：北アルプスのライチョウをとりまく“今”を知る

信州自然講座では、苦労話を交え、成果についてお伝えしました。

今回の調査では、早朝の4時から夜の19時まで一時間毎にライチョウがいる位置をGPSロガーに記録にしました。得られたデータを見た第一印象は、なわばり期（図2a）と同様になわばりを解消した秋期（図2b）でもあまり行動する範囲が広がっていないことです。また、彼らは尾根などの自然の境界をうまく利用

しているんだなあということです。爺ヶ岳南峰西尾根になわばりを構えた雄は登山道のある尾根から北にはほとんど足を踏み入れていません（図2a）。また、爺ヶ岳中峰西側（富山県側）を中心に行動している雄は長野県側に滅多に足を踏み入れていません。

信州自然講座では調査の概要をお話ししましたが、今後、詳細に解析し、論文等で成果をお伝えしていきたいと思ひます。（堀田）

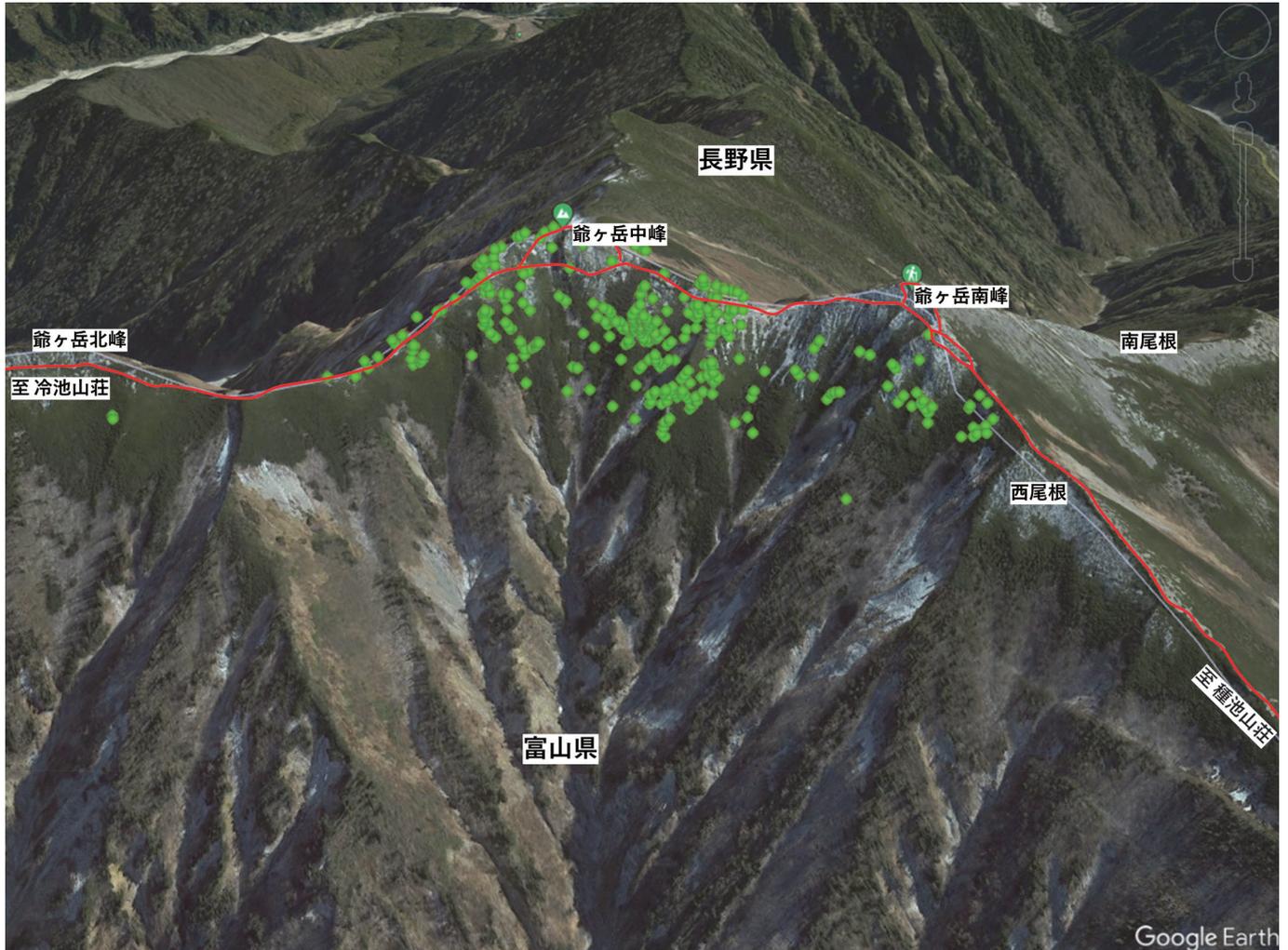


図2b 爺ヶ岳中峰富山県側に行動圏がある成鳥雄の活動点（緑色）（2021年9月8日～10月6日まで4～19時まで1時間毎に取得、ただし衛星の捕捉状況が悪い点は除く）。赤線は登山道を示す。



ライチョウの野生復帰への挑戦～市立大町山岳博物館の取り組み

市立大町山岳博物館では、絶滅の危機に瀕しているニホンライチョウの野生復帰を目指して様々な取り組みを行っています。特に、中央アルプスでのライチョウの復活事業が注目されています。

◆中央アルプスでの復活事業

中央アルプスでは、1969年を最後にライチョウが

絶滅したとされていましたが、2018年に1羽のメスが目撃されたことをきっかけに、復活事業が始まりました。環境省や日本動物園水族館協会、大学研究機関などが協力し、2020年には動物園から中央アルプスへの卵の移植や、乗鞍岳の野生ライチョウの家族の移送が行われました。その後、2021年から2022年にかけて、野生由来のライチョウを動物園で